

## 《何故、日本は戦ったのか？》日清戦争後編

8月1日	日清戦争 宣戦布告
9月16日	平壤を攻略 ほぼ全土を制圧
9月17日	黄海の海戦 北洋艦隊を破る
10月	第一軍、国境の鴨緑江を破り満州に攻め込む 第二軍 遼東半島に上陸
11月21日	旅順陥落

### <明治28年>

残った艦隊が逃げ込んでいる山東半島突端の港、威海衛に陸軍が背後から要塞を攻め、砲台を奪い、海軍は水雷による攻撃で「定遠」に大打撃を与える。

### <明治28年2月12日>

丁汝昌（ていじょしょう）艦隊提督降伏 清は休戦を求める

### <明治28年3月19日>

清は北洋大臣の李鴻章が来日、下関の料亭「春帆楼」で伊藤博文との間で講和交渉始まる

### <明治28年4月17日>

清が朝鮮の独立を認める等の、下関講和条約が調印される

わずか9ヶ月足らずで日本が勝利する。

アジアの大国で軍事的にも優位にある清国が敗れたのは、新生した秩序で士気も高かった日本に対し、老朽化した秩序で老いており、士気は極端に低かったからである。即ち意気ごみの優劣が勝負を決定づけた。「眠れる獅子」と見られていた清は、今や「眠れる豚」とされ西洋列強の権益の対象となった。今の日本は自分の国を自分で守ろうとする意気ごみさえない人が多い。支那から国を守ることが出来るだろうか？支那は尖閣諸島問題で常にチョッカイを小出しに日本国防の意気込みを試している。

### 三国干渉

下関条約で日本は清が朝鮮の独立を認める事、日本に対し遼東半島と台湾の割譲、2億両（テール）〔当時の金で3億円〕の賠償金を払う3点で合意された。しかし調印から6日後にはロシア・ドイツ・フランスの圧力による三国の干渉に屈し、日本はせっかく得たこの地を放棄せざるを得なかったのである。調印から6日後の4月23日、3ヶ国の

日本公使が外務省に林董（タダス）外務次官を訪ね、本国からの意向として遼東半島の放棄を求めた。将来「極東の永久平和に障害を与える」というのがその理由であった。しかも極東海域に多数の艦隊を集結させ、拒否すれば直ちに武力を行使する攻撃態勢を整えた上での脅迫的要求だったのである。

この時代は白人至上主義であり、将来白人が分割支配するべきであると思っている白人各国は、猿の一種の東洋人が領有するなど許せないという感情であり、自らの領土を増やすのに手段を選ばず……の帝国主義であり、孤立した日本は三ヶ国相手に戦う力はなかった。その後、ロシアは遼東半島を、ドイツは山東半島を、フランスは広東湾を、イギリスは久龍半島を強奪した。昔も今も外交は軍事力によって勝敗は決まる、此の現実を我々は国策に反映すべきであろう。

この時の国民は激高し焼き討ちもあった。政府も力による干渉に反発したが、陸奥のみが冷静で、今三国とコトを構えても勝てるわけではない。清もこの機会を捕えて講和をご破算にする恐れもある。それより今は国民の西洋に対する反発を利用し国力を増すべき……として5月4日閣議と大本営の会議で受諾を決定した。

国民に対しては「深く時勢の大局を視、微を謹み、漸を戒め、邦家の大計を誤ることなきを期せよ」との詔が発せられ、福澤諭吉は「ならぬ堪忍、するが堪忍」と言い、著名なジャーナリスト三宅雪嶺（せつれい）が新聞日本で「臥薪嘗胆」の言葉をタイトルに「後日を期すべし」と書いたところ、政治家から庶民にいたるまで日本人の心を捉え、この「臥薪嘗胆」を合言葉に、他国の干渉を跳ね返せるような強い国になるべく軍備の増強につとめ、とりわけロシアの脅威に備えて行くのである。これは正しく、陸奥宗光の冷静な判断通り国力を増して行く。



陸奥宗光

## 台湾統治

下関条約によって日本は台湾を割譲することになり、初代の総督となったのは鹿児島出身の樺山資紀（すけのり）が台北に乗り込んで総督府を開き、植民地統治を始めた。



樺山 資紀

台湾はオランダなど西欧の国に支配された時期もあり、明確に清の版図に入ったのは1683年である。清は台湾中部から北部へと開拓を進めたが、山地の多い東部は19世紀に入ってもほとんど未開の状態だった。先住民の高山族の支配も未だならず、阿片を吸う悪習もあり、清も困り切っていた。清の全権李鴻章も伊藤博文に対し「貴国は台湾に手を焼くよ」と忠告したと言われる。劉永福将軍が率いる「台湾民主国」軍は日本の近衛師団と頑強に戦った。その為日本は次々と兵力を増員し、明治28年11月ようやく平定した。

一旗揚げようとする悪徳商人が役人と結託し台湾人から搾り取ろうとしたり、軍の中にも総督の命令を無視し勝手に武力を振うものもあり、混乱し、一段と台湾人の反発を買っていった。最初の3年間程は高山族、特にその中の高砂族等の激しい武力抵抗にあい、日本国内では「台湾売却論」まで出た始末であった。

樺山の後は桂太郎、乃木希典、児玉源太郎と長州出身の陸軍軍人が続いた。しかし皆成果は上げられず、乃木も統治の困難さに絶望し一年余りで辞め、4代目児玉の起用によって、やっと統治が本格化した。明治31年児玉源太郎は総督府民政局長に後藤新平（医師）を起用して統治を軌道にのせた。後藤は彼の統治哲学である「平目（ひらめ）の目」を実践し、台湾の古い慣習や制度を生かし、日本のシステムを押しつけなかった。

古い慣習、制度を綿密に調べる「旧慣習調査」を実施し、治安の安定、医療から産業まであらゆる分野で改革を成功させた。



後藤 新平

台湾の今の中学2年生の社会科教科書には「総督府は日本統治のはじめ、水道を敷設して、都市住民にきれいな飲料水を供給し、都市の地下排水工事を行った」と書かれている。台湾は「化外（化外）の地」「瘴癘（しょうれい）の島」「悪山毒水蛮雨の島」と支那人は書き残している。平均寿命30才の島を日本は税金で近代化したのである。

台湾には、水道担当の浜野弥四郎、土木・交通・都市計画担当の長尾半平、鉄道担当の新元鹿之助、アジア最大のダムを完成させ農耕地拡大・電力開発に貢献した八田與一等の遺徳に今も台湾の人たちは敬意の念を捧げている。同じ政策を行った朝鮮とは比較にならない民族性である。恩を仇で返す民族とは親交する必要はなかろう。

日本人はもっと優越感ではない、日本人としての誇りをもつべきではないだろうか！！もっと己を信じることである。

平成27年3月8日  
志雲会代表 有馬正能